

津村修二短編集

# スイッチ

on

off

津村修二 短編集「スイッチ」

## 津村修二 短編集

# 「スイッチ」

### 目次

真実の村と嘘の村	4	電車	22
嘘のない世界	5	願いの石	23
1冊の本	6	モスキート・カフェ	24
砂時計	7	恋するカーテン	25
蚊の疑惑	8	あまのじゃく	26
マトリョーシカ	9	信号機	27
周知の事実	10	トリック	28
白い闇	11	迷路	29
ビニール傘の涙	12	夜の都市	30
点と線	13	透明人間	31
2人の目撃者	14	箱	32
気球さん	15	机上の空論	33
磁力	16	セレンディピティ	34
サイフ	17	音楽	35
命の数式	18	主人公	36
巡る季節	19	思い出倉庫	37
地球の作り方	20	枯山水	38
映し鏡	21	アイデア	39

## 【真実の村と嘘の村】

昔、真実の村と嘘の村という二つの村がありました。

二つの村には掟（おきて）があり、真実の村の人は嘘を言うと死んでしまい、  
嘘の村の人は真実を言うと死んでしまいます。

ある時、真実の村の男と、嘘の村の女は恋に落ちました。

男は、「あなたが好きです。」と言いました。

女は、「あなたが嫌いです。」と言いました。

男は、「それでも、あなたのことが好きなのです。」と言いました。

女は、「あなたのことは、嫌いです。ごめんなさい。」と言いました。

男は、「わかりました。あなたのことはあきらめます。」と去ろうとしました。

女は、「待ってください。本当はあなたのことが大好きなのです。嘘はもうつけません。」  
と、掟を破り、真実を言ってしまいました。

女は死にました。

男も死にました。

男も掟を破り、嘘を言ってしまったからです。

「あなたのことはあきらめます。」と。

愛し合う二人の死。

愛は、時に大きな奇跡を起こすものです。

二人は、不思議な力によって生き返り、

二人は喜びに包まれて、口づけを交わしました。

それからというもの、真実の村と嘘の村は一つになり、  
世界は真実と嘘を自由に言える世界になりました。

## 【嘘のない世界】

すべての嘘を禁止する。

嘘は、この世の悪でしかない。

嘘を言う者は捕まえて罰する。

これこそが真実の理想郷だ。

そうだ。正しいのだ。

どんどん、真実の人間の姿が見えてくる。

・・・しかし、

なぜだ？

人々の悲しみが増えていくのは？

いや、そんなはずはない。  
私は正しいことをしているだけだ。

嘘のない世界。  
こんなに真実に満ちたすばらしい世界はないだろう。

すべての嘘を禁止する。

嘘は、この世の悪でしかない。

嘘を言う者は捕まえて罰する。

これこそが真実の理想郷だ。

(この話はどこにもない嘘の話です。)

## 【1冊の本】

ここに1冊の本がある。

この本の1ページ分の厚さを測るとき、  
そのまま定規を当てると、  
薄すぎてよくわからない。

だが、その薄すぎる1ページが  
何百と積み重なることによって、  
厚さを生み出し、分厚い本となる。

それならば、厚さとして測ることは容易である。

本の厚さを測り、ページ数で割れば、  
1ページ分の厚さが求められる。

もし、1ページが1日だとしたら、  
それが測れないほどの薄さだとしても、  
7ページで1週間、  
365ページで1年となり、  
確かな分厚さを生む。

何気ない1日のように見えて、  
それは密かに厚さを作り、  
やがては分厚い本を作るのかもしれない。

だとしたら、  
たとえ、どんな1日でも無駄ではない。  
無駄なページなど本には無いのだから。

## 【砂時計】

「時刻」ではなく、「時間」を告げる砂時計。

じっと、砂が落ちていく様子を見ていると、  
砂時計から、過去・現在・未来の「時間」が見えた。

流れ落ちた砂は過去。

流れ落ちる砂は現在。

そして、上にまだ残っている砂が未来。

人の一生は砂時計。

流れ落ちた砂は二度と戻らないし、  
流れ落ちる砂を止めることはできないし、  
上にまだ残っている砂も、  
いつかは必ず流れ落ちるときを迎える。

すべての命あるものが、この世に生を享けた瞬間に、  
ひとつずつの砂時計が与えられ、  
何者かによって、ひっくり返されたのなら、  
今自分はどれだけの砂を流れ落としてきたのだろう。  
あと、どれだけの砂が残っているのだろう。

答えは誰にもわからない。  
でも、わからないからこそ、大切にすることかもしれない。

砂時計は、「時間」を告げるとともに、  
流れ落ちる「時間」が、  
儂くて美しく愛しいものであることも教えてくれた。

## 【蚊の疑惑】

蚊には、ある疑惑がある。  
蚊は吸った人間の血液をとある場所に持って行っているのでは？という疑惑だ。  
以下にその疑惑についての報告をまとめた。

### －蚊のある疑惑についての報告－

疑惑のその場所とは、山間に建設された巨大な工場らしい。

工場には、人間の血液を吸った蚊が無数に集合し、  
自らが吸った人間の血液を工場に設備されたろ過器へと排出し、  
そうやって、人間の血液をろ過しているらしい。

ろ過された血液は、ベルトコンベア式のチューブで送られ、  
さらに、血液の成分を化学的に分量調整・加工などして、  
A・B・O・ABの4種に作り分けを行っていくという。

そして、分けられた4種の血液は新たなチューブを通り、  
研究者達によってチェックが行われ、  
通過すると、真空状態でパッケージ化されていくらしい。

その工場内の研究室のパソコンのディスプレイ画面には、  
無数の蚊の配置情報が表示されているらしい。  
蚊に、GPS機能が搭載されているからだという。

蚊は、極秘裏で政府が献血のために作った血液の回収生物であり、  
もともこの世には存在しない人工的生物だったという説もあるという。

輸血用の血液の不足、献血への協力の少なさに懸念を示した政府が、  
この危機的状況を見兼ねて、血液を吸って回収してくれる生物を開発したという  
経緯があるらしいが、定かではない。

以上、蚊のある疑惑についての報告である。

## 【マトリョーシカ】

マトリョーシカとは、可愛い女の子が描かれた木製の人形であり、人形の中からまた人形が出てくる入れ子構造のロシアの人気お土産品です。これは、そんなマトリョーシカのお話です。

私たちは、街角の雑貨店に並ぶマトリョーシカ。  
私たち5人は、体の大きさはみんな違うけど、とっても仲良しなの。

私は、5人の中で真ん中にいるエカテリーナ。  
私より体の大きな2人に包まれ、私より体の小さな2人を包むの。

お店にお客さんが入ってきて、私たちのことを見つめるとき、私には真っ暗でよくわからないけど、きっと1番体の大きなアントニーナを見て、微笑んでくれているんだろうなって思うと、すごく嬉しくなっちゃう。アントニーナも私たちの代表として、お客さんを笑顔で迎えてくれているわ。

でもね、ある日、4番目に体の大きなユーリアが、急に泣き出しちゃったの。

「・・・私、何でもっと大きな体で生まれてこなかったんだろう。もし、アントニーナみたいな体だったら、どんなに良かったかしら。」ってね。

アントニーナも、2番目に体の大きなテレシコワも、私も、ユーリアに泣き止んでもらおうとしたけど、逆に怒らせてしまったの。

「私より体が大きい人たちは良いわよね！」ってね。

そんな中、ユーリアよりも体の小さい5番目のアレクサンドラが言ったの。

「私はあなたよりも小さいけれど、今の大きさが好きなの。だって、人間が私たちを取り出すとき、大きい方から取り出すわよね？大きい方から取り出すから、やっと苦労して私を取り出したときに、そのすごく喜んだ人間の笑顔に、私が最初に会うことができるから。みんな、それぞれに幸せがあるの。体の大きさは関係ないのよ。だからね、ユーリアももっと自分の体の大きさを幸せに感じて。」

ユーリアは、その言葉で泣き止んだわ。そして、笑顔を取り戻したの。私もそう思う。幸せなんて、それぞれにあるんだってね。

## 【周知の事実】

例えば・・・

地球が丸いこと。  
世界が広いこと。  
歴史が深いこと。

例えば・・・

リンゴを落とせば落ちる、ということ。  
どんな生物もいずれ死ぬ、ということ。  
1日が24時間、ということ。

例えば・・・

例えば・・・

例えば・・・

この世界には周知の事実が溢れている。

いっそのこと、すべてを知らない世界に行ってみたい。  
そうすれば何もかもが発見の連続だ。  
知らない者同士が集まって、既成概念なんてぶち壊して、  
好奇心という地図を頼りに冒険の旅に出掛ける。

すべてをゼロから作っていく。  
どこかの誰かが発見した法則も、ここでは何の意味も持たない。  
勝手に見つけてほしくない。勝手に教えてほしくない。  
自分で見つけて知る喜びが欲しいだけだから。

周知の事実には縛られたくはない。  
周知の事実に関わされたくもない。  
自分の事実をもっともっと感じていきたいのだ。

## 【白い闇】

未来のある日。

目で見たもの、耳で聞いたもの、鼻で匂ったもの  
舌で味わったもの、手足や肌で触れたもの。

それら五感で得た体験をデータとして記録できる装置  
「ブレイン・レコーダー」が発売された。

ブレイン・コードでパソコンに接続し、  
再生ソフトをパソコンにインストールすれば、いつでも再生が可能だ。  
データをメモリースティックに入れて持ち出せば、ネットカフェでも堪能できる。

それは、猛スピードで世界中に普及していった。

そして、発売から20年経った。

子供の頃に連れて行ってもらった動物園も、大好きだったロックバンドのコンサートも、  
高級レストランの極上のグルメも、亡くなってしまった故人との思い出も、  
とにかく過去に体験した記憶であれば、当時のまま鮮明に再現した。  
まるでその場にタイムトリップしたかのように。

他人の体験データの再生が合法化されると、  
レンタルビデオショップには、著名人やタレントの体験データが並んだ。  
インターネットによる体験データのダウンロードも流行した。

人々は次第に自らが体験することが減っていき、  
他人による体験を疑似体験することが増えていった。

その結果、人間から五感は奪われた。  
それは、白い闇としか形容できない瞬間だった。

## 【ビニール傘の涙】

僕は、ビニール傘。

2週間前、僕はめでたく素敵なお主人様と出会うことができたんだ。

出会いは、僕ら傘たちにとって晴れ舞台である大雨の日。  
いつものようにコンビニの中で、傘仲間たちと一緒に並んで、  
誰かに買われるのを今か今かと待っていたら、  
ご主人様が現れて、僕を見つけて手に取ってくれたんだ。

僕は、ずっとコンビニの中でただ流れる BGM を聴きながら、  
運動もせずにストレッチを怠った生活をしていたので、  
さすがに初日は全身を大きく広げるのが辛かったね。  
あ、でも、もちろん傘として、ご主人様を絶対に濡らさないようにはしたけどね。  
それが、傘のプライドってのもんだからさ。

それから、5日間は雨が続いたから、ご主人様はいつも僕と一緒に出掛けてくれたんだ。  
優しいご主人様で本当に僕は幸せ者だった。僕を丁寧に大事に扱ってくれたから。

その後、1週間は晴れの日が続いたから、僕は傘立ての中で留守番をしていたよ。  
毎日毎日、ご主人様の帰ってくる姿だけが楽しみだった。  
こんなふうに晴れの日が続く日は、早く雨にならないかなって、  
次の雨がととてもとても待ち遠しく感じられるんだ。  
てるてる坊主が晴れを祈るためにあるのなら、雨を祈るための何かが欲しいくらいだよ。

そして、僕とご主人様が出会ったときと同じくらいの大雨の日が遂に来た。  
久しぶりのご主人様の手の温もりに心が躍っていた。

もう僕も見慣れた通勤コース。横断歩道を渡るご主人様を雨から守っていた。  
あと少しでその横断歩道を渡り切る次の瞬間、ご主人様は右折してきた車に、はねられた。  
僕は宙を舞いながら、とっさに横断歩道の脇に倒れるご主人様の方へ着地した。  
ご主人様を雨から守ってあげることくらいしか、傘の僕にはできなかったから。

でも、僕は傘失格だね。  
僕の涙でご主人様を濡らしてしまったから。

## 【点と線】

廊下を歩きながら、窓から中庭に植えられた2本の木を見ていたら、  
それがあある地点で一瞬だけ1本になった。

1本になったと言っても、消えたという魔法のようなことではなく、  
ただ単に、手前の木に奥の木が重なって見えなくなっただけである。

歩き出すとまた2本の木になったが、  
一直線上に続く廊下の中で、再び重なることはなかった。

廊下は、四角い中庭を囲うように続いている。

廊下を右へ曲がったが、ここには重なる地点はなかった。

再び右へ曲がり、最初に重なった地点の反対側の廊下へとやってきた。

ここでは、重なる地点を見つけることができた。

念のため、もう一度右へ曲がり、中庭を1周する形にはなるが、廊下を歩いてみた。

ここにも、重なる地点はなかった。

結局、2本の木が重なった廊下は、最初に歩いた廊下と、その反対側の廊下だけだった。

次に、木の配置について考えてみた。

もし、この中庭の木のように、手前と奥に並ぶのではなく横並びであったらどうか？

このときは、最初の廊下では重ならないが、次の廊下では重なる。

おそらく、同様にその次の廊下では重ならず、その次の次の廊下では重なるだろう。

つまり、木の配置がどう変わろうと、重なる地点は必ず2つ存在する。

最後に、重なる地点について考えてみた。

最初の場合も、次の場合も、どちらも重なる地点は、向かい合った廊下に位置するが、

全ての木の配置の関係でもそれが成り立つだろうか？

2本の木を結んだ線の対角上に向かい合う2つの点が重なる地点である。

そうすると、木の配置によっては、必ずしも向かい合った廊下に位置しないことがわかる。

では、向かい合った廊下に重なる地点が必ず現れる、木の配置の方法はあるだろうか？

その方法が、1つだけ見つかった。

1本の木を中庭の中心に配置すれば、もう1本の木はどこに置いても、

向かい合った廊下に重なる地点が必ず現れる。

日常には、こうした些細な発見への「点」が無数に存在するのかもしれない。

「点」と「点」に「線」を感じたとき、初めて人は「面」の存在を知る。

## 【2人の目撃者】

同じ日の同じ時刻に同じ人物が、全く違う場所で目撃された。

11月12日の午前10時49分、指名手配中の容疑者が、  
2つの場所で2人の人物に目撃されている。

2人の証言の正当性は確かであり、  
2人が目撃した人物が、指名手配中の容疑者であることが証明された。

しかし、同じ日の同じ時刻に、体1つで全く違う2つの場所に存在できるのか？

単純に考えれば、分身の術でも使わない限り、無理ではないかと考えてしまうが、  
ある方法を使えば、いとも簡単にそれは可能になるのだ。

「時差」である。

目撃された2つの場所とは、東京とニューヨークだったのだ。

12日の午前10時49分、容疑者は東京でまず目撃された後に、  
午前11時54分発の飛行機でニューヨークへ飛んだ。

東京からニューヨークまでの移動時間は12時間半。  
つまり、日本時間で13日の午前0時24分に容疑者はニューヨークに着く。

あとは、日本とニューヨークの時差だ。  
サマータイム（4月の第1日曜～10月の最終日曜）中の時差は13時間となるが、  
目撃の日は11月12日であるので、14時間だ。

日本時間から14時間遅らせた、ニューヨーク時間で12日の午前10時24分に、  
容疑者はニューヨークに着いている計算になる。

目撃時刻は、午前10時49分だから、目撃されていてもおかしくない。

同じ日の同じ時刻に同じ人物が、全く違う場所で確かに存在していた。

## 【気球さん】

ぼくは気球さんが大好きだ。

ふわふわ、お空を飛んで楽しそう。

あか、あお、きいろ、みどりにオレンジ。

色とりどりのカラフルな気球さんたちが、

お空のキャンバスの上で、お絵描きしてる。

風さんたちも、まっしろな雲さんたちも、

一緒にダンスしながら、お絵描きしてる。

額のない大きな絵みたい。

ほら、ここにいた大きな気球さんたちも、

もうあんなに遠くで小さくなってる。

ぼくの指に隠れちゃうよ。

電線の向こうに、小さな気球さんたちがいっぱい。

なんだか、楽譜みたい。

どんなメロディなのかな？

お歌が上手な鳥さんに教えてもらいたいな。

## 【磁力】

俺の行くところには、いつも人が集まってくる。

ランチタイムの時間をずらして行くのに、自分が店に入ると、何人も客が入ってきて、挙句の果てには行列さえできるほどだ。俺には、そういう人を引き寄せる力があるのだろうか。

大勢の人々が、俺を追いかけてくる夢をよく見る。そんな悪夢を見ては飛び起きるが、夢から覚めてもそれは変わらない気がした。

俺は、初めて精神科というものに行った。医師は、「ここへ行けば、すべてわかりますよ。」と、病院のメモ帳に住所を書くと、その書いたメモを千切って俺に渡した。

意味もわからずに、俺はその足でその場所へと向かった。薄汚れたテナントビルの3階の奥にある一室で、スーツ姿の中年の男が一人、俺を微笑みながら迎え、応接ソファへ座らせると、男は俺に語り出した。

「私は、この世の人の流れをコントロールする神の使いです。我々の組織は、万が一のために、全国の精神科医と連携して、あなたたちのような方々を救っているんですよ。ここへ来たということは、あなたもご自分の磁力に疲れたのですね。ざっと説明しますと、この世の人たちにはすべて、例外なく、目には見えないオーラのような磁力というものが少なからず働いているわけです。それには2種類あって、S極とN極とがあります。磁力は、人との出会いや巡り合わせを支配します。しかし、ごく稀にあなたたちのような磁力の強い人間は、意図しないうちに、多くの人々を寄せ付けてしまうため、その力を扱い切れずに、精神を病んでしまうのです。ただ、その力を利用して大衆を引き寄せた歴史の英雄や政治家も数多くいますがね。せつかくの力なのに残念ですが、あなたには負担が大きかったようですね。」

俺は、自ら人を引き寄せる力とやらを放棄したが、迷いはなかった。磁力なんかで引かれ合うのではなく、自然に惹かれ合いたいからだ。

## 【サイフ】

サイフの中の僕達は、多くの別れを繰り返します。

サイフが開かれた瞬間、それは突然にしてやってくるのです。

せっかくみんなと仲良くなっても、すぐにお別れです。

物知りだった1000円札のおじさんも、優しい500円玉のお姉さんも、

いつも面白い話をして笑わせてくれた100円玉のお兄ちゃんも、

さよならも言わずに、僕の元を去っていきます。

去られるだけじゃなくて、僕がみんなから去る時もあります。

さよならも言えずに、みんなの元を去っていきます。

僕は、去られる時も去る時も辛いです。

だけど、同じくらい多くの出会いもあります。

僕達のいるサイフの中に、お釣り組という新しい仲間が入ってきた時です。

そんな時は、新しい仲間のために歓迎会を開きます。

僕も、新しいサイフに入った時にはしてもらっています。

人間にばれないように、こっそりやっています。

ただ、1回だけ僕が人間にばれそうになった時があります。

それは、偶然の再会に喜んだ時です。

## 【命の数式】

(1)

$$1 \times 1 = 1$$

$$3 \times 1 = 3$$

$$6 \times 1 = 6$$

$$32 \times 1 = 32$$

$$38 \times 1 = 38$$

$$60 \times 1 = 60$$

$$64 \times 1 = 64$$

(2)

$$16 \times 1 = 16$$

$$18 \times 1 = 18$$

$$21 \times 1 = 21$$

$$47 \times 1 = 47$$

$$53 \times 1 = 53$$

$$75 \times 1 = 75$$

$$79 \times 0 = 0$$

- (1) の数式は、ある家族を表したものである。  
(2) の数式は、その家族の15年後を表したものである。

生きてきた年数に命を掛ける。  
どんなに生きても、命が無ければ0になる。  
すべて無にして、この世を去るのだろう。

0と1では、たった1つしか違わない。  
だが、そのたった1つが命の重さ。

世界は、そんな1をもっと理解する必要がある。  
1が1を奪う数式など、決してあってはならないのだ。

## 【巡る季節】

季節の変わり目に出会った時、  
季節の住人がやってきたと感じる。

春ならば、春の住人。  
夏ならば、夏の住人。  
秋ならば、秋の住人。  
冬ならば、冬の住人。

彼らは、交代しながらやってきては、  
我々に季節の恩恵を与えてくれる。

永遠に休むことなく、与え続けてくれる。

見返りなど求めないし、裏切ることもない。

無償の愛で、ただただ黙々と与え続けてくれる。

桜が咲く時。  
入道雲が現れる時。  
紅葉する時。  
雪が降り注ぐ時。

移りゆく季節を感じる、季節の住人の気配。

目には見えないし、感じることしかできないけど、  
確かに足跡を残して去っていく。

彼らは見返りなど求めていないだろうけど、  
心から「ありがとう」と言わせてほしい。

## 【地球の作り方】

水と土を用意します。

それを、7対3の割合で容器に入れます。

それから、容器に人間を振りかけます。

これが地球の作り方です。

水を用意します。

それを全部容器に入れます。

これが未来の地球の作り方です。

こうなる前に、

手遅れになる前に、

私たちが出来ることとは何なのでしょう。

容器は1つしかありません。

代用もできません。

1つだけしか無いのです。

私たちは1つの容器の中で生かされていることを知り、  
容器をもっと大切にしなければ、やがて消えてしまうでしょう。  
容器の中の水は、今もその量を増やし続けています。

## 【映し鏡】

すべて自分に降りかかってくるんだね。

映し鏡のように。

善いことをすれば、善いことが。

悪いことをすれば、悪いことが。

自分のすべては鏡に映し出される。

誰も見ていなくても、鏡は必ず見ているから。

今、輝かなくても、きっと見ているから大丈夫。

それは無駄にはならないから。

輝いた鏡は、周りの鏡をも照らしていくね。

その輝きを待っている鏡もあるはず。

鏡を輝かせるのも曇らせるのも、自分次第だね。

どんな鏡だとしても。

やがて、この世から砕け散り消えゆく鏡なら、

その時が訪れるまでは、輝き照らす鏡でいたい。

あのきらめく星のように。

## 【電車】

海と山の間を、右へ左へとうねりながら続く線路。  
今日も真っ赤な電車はこの線路を走っています。

座席は、向かい合った7人掛けで、  
海に近い方を海側、山に近い方を山側と呼んでいます。  
1車両には、7人掛けの座席が3つ並んでいます。

ここでクイズです。

隣り合った車両の同じ海側の同じ真ん中の7人掛けの座席に座った2人が、  
座ったままでごく自然に顔を合わせることが出来ました。

それはなぜでしょうか？

ヒントは、電車は動いているということです。

頭を柔らかくして考えれば、すぐにわかると思います。  
わからない人は、もう一度始めからよく読んでみてください。

いかがですか？わかりましたか？

それでは、正解の発表です。

正解は、「電車のカーブを利用したから」です。  
電車のカーブでは、車両にもうねりが生じて、並列関係にあった座席の関係が崩れるため、  
2人の位置関係も変わり、2人はごく自然に顔を合わせることが出来たのです。

簡単でしたか？それとも、難しかったですか？  
電車に乗る時、実際にどんなふうに見えるか、確認してみると面白いです。

## 【願いの石】

デジタル君とあなろぐ君という2人の友達がありました。

デジタル君は、何でも正確。  
時間は守るし、計算は上手だし、字だってものすごく綺麗です。  
バイオリンをやらせれば、楽譜通りに完璧に弾きこなします。

一方、あなろぐ君は、何でも適当。  
時間は遅れるし、計算は間違うし、字だって癖があります。  
バイオリンをやらせれば、どうしても微妙にずれて弾いてしまいます。

そんな適当なあなろぐ君は、いつだってデジタル君の正確さに憧れていました。  
「僕はドジでいい加減。デジタル君みたいになれば、どんなに幸せだろう。」

ある昼下がりに、あなろぐ君は、街でこんなうわさを聞きました。  
それは、迷いの森を抜けたところに、  
どんな願い事でも1つだけ叶えてくれるという願いの石がある、といううわさでした。

「これだ！これしかない！これでデジタル君みたいに正確になれるように願うんだ！」  
あなろぐ君は、1人で街を飛び出し、願いの石を探しに出掛けました。  
深い暗闇が押し寄せる不気味な迷いの森を、恐る恐る抜けたあなろぐ君は、  
遂に、願いの石がある場所へと辿り着くことが出来ました。

しかし、すでにそこには願いの石を探している人がいました。  
それは、デジタル君でした。あなろぐ君は驚き、デジタル君も同じように驚きました。

「デジタル君、まさか君がここにいるとは思わなかったよ。  
もしかして、何をやってもダメな僕のために、僕の代わりに石を探してくれていたのかい？」  
「とんでもないよ！僕は、あなろぐ君みたいに人間味のある温かさが欲しくて、  
それを願い石にお願いしようと思って、探しに来ているんだから。」

2人は、お互いの願いたいことを打ち明けると、何だか  
願い石を探すことなんて、どうでもよくなってしまいました。  
デジタル君とあなろぐ君は、夕暮れの中、仲良く街へと一緒に戻っていきました。

## 【モスキート・カフェ】

私は、大人の落ち着いた雰囲気のカフェを作るのが夢だった。  
そこで、「モスキート・カフェ」というものを作った。  
モスキート音を店に流し、入店しようとする若者を排除するのだ。

モスキート音という音は、高周波数の音であり、  
若者には聞こえるが、年齢とともに聞こえにくくなり、  
大人には全く聞こえない音である。  
これを利用すれば、大人だけが集うカフェの出来上がりだ。

私は、モスキート音のみが入っている CD を手に入れ、BGM と一緒にさっそく店で流した。

私の発想は間違っていなかった。

若者たちは店に入ってきた途端、すぐに耳を押さえて店を出て行った。  
そして、大人たちは、何の違和感もなく、私の店でのひとときを楽しんだ。

これで念願だった私の夢が実現した。  
利益ではなく、大人のお客様のためのくつろぎのカフェを提供する、という私の夢が。

忙しいランチタイムも終わり、私がこの店作りの成功の余韻に浸っていると、  
1人の若者が店に入ってきた。

私は、また耳を押さえて出ていこうかと思っていたら、  
その若者は、テーブルに着くと、メニューを見ながら、私に注文した。  
私は不思議に思い、この若者に音のことをさりげなく聞いてみたが、  
この若者には、モスキート音が聞こえていないようだった。

私が注文されたアイスコーヒーを作っていると、今度は若者の集団が入ってきた。  
同じようにごく普通に彼らもテーブルに着いた。  
1人ならまだしも、こんなに多くの若者がモスキート音に反応しないはずはない。

ふと、CD プレイヤーに目を向けると、モスキート音の CD が止まっていた。  
大人の私は、それにはさすがに気付かなかった。

【恋するカーテン】

僕達はカーテン。  
私達はカーテン。

向かって右にいるのが僕。  
向かって左にいるのが私。

今は、2人とも両脇で縛られてしまってるけどね。  
そうね。でも、日が暮ればまた近づけるわ。

早く君のそばへ行きたいな。  
私だって、あなたのそばに早く行きたいわ。

でも、もうすぐだね。最近は寒くなって、すぐに日が暮れるから。  
だから、私は寒い季節が好きなの。

毎年、「寒い、寒い」って言うてるくせに。  
それでも好きなの。あなたのぬくもりを長く感じていられるから。

ばかだなあ。  
だって、本当のことなんだもん。

もう日が暮れたね。  
そうね。あ、人が近づいてくるよ。

僕達をほどいてくれるよ。  
やっと、近づけるのね。

「サーッ」(カーテンが閉まる)

今日は僕達の誕生日。お祝いのキスをしようよ。  
うん。大好きだよ。

「カチャッ」(両脇の2つのカーテンが1つになる)

## 【あまのじゃく】

1匹の思春期を迎えたカエルがいました。  
その思春期ガエルには悩み事がありました。

「個性的になりたい」ということです。

みんなと一緒に群れることはカッコ悪い。  
みんなと一緒に平凡でスリルがない。  
みんなと一緒にでは個性がないじゃないか。

そう考えた思春期ガエルは、みんなと群れることを止め、  
体をカラフルに派手に染め、単独で行動するようになりました。

しばらくは、周りとは違う個性的な自分に満足していました。

しかし、すぐにまた違う悩みが生まれました。

「個性なんて捨てたい」ということです。

みんなと一緒に群れることはカッコ良い。  
みんなと一緒に平穏で安心する。  
みんなと一緒にでは仲間外れにならないじゃないか。

そう考えた思春期ガエルは、またみんなと群れ始め、  
体も元通りの地味な色に戻し、集団で行動するようになりました。

しばらくは、周りに溶け込んだ画一的な自分に満足していました。

しかし、すぐにまた違う悩みが生まれました。

「個性的になりたい」ということです。

あまのじゃく、あまのじゃく。心はいつも、あまのじゃく。  
あまのじゃく、あまのじゃく。寄せては返す、あまのじゃく。

## 【信号機】

僕は信号機の黄色。  
右から赤・黄色・青と並んでいるから、ちょうど真ん中に位置しているね。

ある日、隣にいる赤さんと青さんに言われたんだ。

「黄色さんは、楽で良いよね。僕らに比べて、  
ほんの少ししか仕事しなくて良いんだから。」ってね。

確かにそうなんだ。

青さんはしばらく光って、「進んで良いよ」ってメッセージを送る。  
赤さんもししばらく光って、「進んだらダメだよ」ってメッセージを送る。  
僕は、ほんの少しだけ光って、「もうすぐ進めなくなるよ」ってメッセージを送るだけ。

2人に比べると僕の仕事する時間は短いよね。

でもね、実は2人が寝ている間に僕は仕事しているんだ。

深夜になると、朝まで2人は寝ているから、僕は1人でずっと点滅してるんだ。

2人はそれを知らないから、僕にそう言ってるだけなんだと思う。

ちなみに、このことは、2人には絶対言わないようにしてるんだ。

1日中、頑張ってる2人には、せめて深夜くらいゆっくり休んでほしいからね。

これも僕の黄色としての仕事。

### 【トリック】

「1」、「2」、「3」、「4」、「5」、「6」、「7」、「8」、「9」  
という1～9までの数字が書かれた9枚のカードがあります。

そのうちの1枚のどこかに1本だけ線を加えることで、  
そのカードの数が3つだけ大きくなりました。

さて、どのカードのどこに1本の線を加えたでしょう？

正解は、

“「6」のカードの6の上に、横に1本の線を加えた”です。

それを表すと、以下のようにになります。

—  
6

トランプなどでは、6と9という数字を見る場合、  
見る位置が反対になると、どちらかがわからなくなり、それを区別するために、  
以下のように、それぞれの数字の下に横線を付けます。

6      9  
—      —

これを利用することによって、  
6の上に横線が加えられたもの=9の下に横線が加えられたもの  
という式が成立します。

つまり、「6」から「9」へと見せかけることによって、  
カードの数を3つだけ大きくさせることが出来るのです。

## 【迷路】

迷路の中、迷ってしまった時は、  
一旦進むのを止めて、展望台に上って眺めてみると、  
進むべき道がわかることがある。

どうにもこうにも進みようがない時は、  
進むことにこだわらずに、  
俯瞰して見つめ直すことで、  
進むことができるようになるものだ。

こんなところで迷っていたのか。  
そこまで悩む必要はなかったのか。  
あんなふうにやれば進めるようになるのか。

展望台では、いろいろと見えてくるものだ。

もしも、迷路の中で先が見えなくなった時は、  
あなたの中にある展望台に上ろう。

展望台は、十人十色で人の数だけ存在する。

山にある人もいるだろうし、  
海にある人もいるだろうし、  
思い出の場所にある人もいるだろう。  
あるいは、それら全部にある人もいるだろう。  
展望台は1つとは限らないからだ。

生きることとは、選択の連続である。  
右へ進むか、左へ進むか、それとも真っ直ぐ進むか？  
そんな巨大な迷路を解くための手掛かりとなるのは、  
紛れもなく、あなたの中の展望台だ。

展望台は、あなたがゴールするその日まで、  
あなたのことを遠くで穏やかに見守っているはずだ。

## 【夜の都市】

私は、上空から夜の都市を見下ろした。

静止画の中で、道路を走る車のネオンだけは流れる動画。

都市というものを動かす動脈と静脈の流れのように、

北から南へ、東から西へとせわしなく流れ続ける。

同時に、その逆へとも際限なく流れ続ける。

確かに、その循環運動には生命を感じてしまう。

まるで、都市という夜行性のモンスターが生きているように。

今、そのモンスターが立ち上がって暴走を始めたら、

私とその歴史的な大惨事の最初の証人になるというのか。

それも私の本望だ。

立ち上がってくれよ、私のモンスター。

こんなにも美しいモンスターならば、その美しさに許される。

薔薇にある棘のように。

美しいものには、それだけの価値がある。

現実の世界で、君が無理というのならば、

せめて今夜は私の中でだけでも、立ち上がってくれ。

一夜限りのナイトショーを、朝が来るまで見せてくれ。



## 【箱】

ここに同じ重さの白の箱と黒の箱があります。

ある実験で、重さのことは知らせずに、被験者に両方の箱を持ち上げてもらって、

その後、「どちらが重かったか？」を聞いたところ、

ほとんどが「黒だ」と答えたそうです。

つまり、実際の重さは、どちらも全く同じ重さなのに、

色という目から得た情報によって、「重い」と感じたというわけです。

このように、私達は多くの情報を、

視覚のイメージによって、決めつけてしまうのです。

「視覚に頼って生きている」

と言っても過言ではないでしょう。

その視覚の決めつけた誤った情報によって、

実は多くの誤解を生んでいるのかもしれない。

「人は見た目で判断してはいけない」

とはよく言われますが、脳は逆行するように、

「人を見ただ目でしか判断しない」のです。

私達は、視覚に惑わされない「本質」を見極めなければいけません。

## 【机上の空論】

ここに、あるイベントで余った賞品が一つあった。  
主催者は、サイコロを振って出た目の人にその賞品をプレゼントすることにした。  
1が出れば、Aさん。2が出れば、Bさん。3が出れば、Cさん。  
4が出れば、Dさん。5が出れば、Eさん。6が出れば、Fさん。  
当然ながら、各自に賞品が当たる確率は6分の1である。

しかし、ずる賢いFさんがある約束を全員と交わしたため、状況が変わった。  
Fさんは、Aさんから1人ずつ、こっそりと呼んで、こう言ったのだ。  
「自分の目が出たら、その場では賞品を貰ったフリはするけど、後で君に賞品をあげるよ。  
その替わり、半分だけ分けてほしい。2人で組んで山分けするんだ！良い考えだろ？  
ただし、君の目が出てもその場では賞品を貰ったフリして、後で僕と山分けすること！」

よって、Fさん以外の各自に賞品が当たる確率が3分の1となった。  
さらに、Fさんの賞品が当たる確率は1分の1 = 100%となった。

結果、サイコロは3が出たため、Cさんが賞品を獲得した。  
しかし、賞品を受け取った後も、全くFさんに分けようとしないCさん。  
後で山分けをする約束をしていたFさんは激怒して、Cさんをこう責め立てた。  
「約束が違うじゃないか！賞品は山分けする約束だろ！」  
Cさんは、冷静にこう答えた。  
「君は、自分の目が出ていたら、どうする気だった？  
実は、君が他の全員とも同じ約束をしていたことを知っているんだ。  
君は、最初から約束を守る気なんてなかったんだよ。  
自分の目が出れば、約束を無視して賞品を全部貰い、他の誰かの目が出ても、  
約束を利用して賞品を半分貰う、君はそんな都合の良いことを企んでいたのさ。  
ずる賢い君を、全員が最初から信用なんてしてなかった。  
だからこそ、最初に約束をさせられたAさんは、みんなに君のことを相談してきた。  
“さっき、Fさんにこんな約束をさせられたんだけど、どうしよう？”ってね。  
僕らはそれを聞いて、君が交渉に来た時には約束に応じたフリをしようって決めたんだ。」  
Cさんの言葉に、同じ思いの仲間たちが頷きながら聞いていた。

動揺するFさん。Cさんは最後に言った。  
「君が考えているのは、机上の空論に過ぎない。人間には感情があることを忘れるな。」

## 【セレンディピティ】

これは、パリに住む貧しいある画家の物語。

画家の名はピエール。

一時は独創的な作風で人気を博したが、ここ数年は作風もマンネリ化し、現在は、アパートで一匹の猫と一人貧しい生活を送っていた。

新しい絵を描いても、決して満足のいく絵は描けなかった。

「こんなもの、新しくもなんともない！」

これが、ピエールの口癖であった。

ピエールは、以前のような独創的な絵を描きたかったのだ。

そんなある日の朝、ピエールはいつも通りにコーヒーを入れた。

ピエールの朝は、いつもこの一杯のコーヒーから始まる。

それは、ピエールにとって、絵を描く前の儀式のようになっていた。

ピエールは、テーブルの上にカップを置き、コーヒーの香りを楽しんでいた。

「こら、マリー。そんなところに乗ってはいけないよ。」

ピエールは、テーブルの上に乗上がった飼い猫のマリーに注意した。

しかし、マリーはテーブルから全く降りようとしなかった。

「マリー！降りなさい！！」

そうピエールが怒鳴った瞬間、驚いたマリーはテーブルの上のカップを倒して、

そそくさと慌てた様子で、テーブルから走り去って行った。

「マリーめ、私のコーヒーをよくも・・・」

ピエールはそう言いながら、すぐにキッチンから拭きものを持ってきて、

そのテーブルの下にこぼれたコーヒーを拭こうとした。

そのとき、そのこぼれたコーヒーの形状に、ピエールは思いもよらぬ発見をした。

「こ、これは・・・新しい芸術だ！！」

ピエールは、興奮したままアトリエへ行くと、その衝撃を絵にした。

ピエールのその斬新な絵は、瞬く間に話題となり、彼は画家として再び成功を収めた。

彼は、想定外に起こる失敗の中に、常識を超えた発見をした。

それはまさにセレンディピティ＝偶然性の発見だ。

## 【音楽】

音楽は永遠の友達だ。

楽しいときは、一緒に楽しんでくれて、  
悲しいときは、一緒に悲しんでくれる。

いつでも君は来てくれる。

君にはいつも救われているね。

生活に彩りを与えてくれる。  
生活に安らぎを与えてくれる。

君には感謝してもしきれないよ。

君に感謝を伝えたい。

言葉には出来そうにないから、  
この気持ち、ピアノに乗せて伝えるよ。

そっと、聴いていて。

ほら、弾くよ。

・・・君、泣いているんだね。

今日は、音が泣いているように聴こえたよ。

もう一回弾くからね。

今度は泣かないで聴いてよ。

もらい泣きしそうだから。

## 【主人公】

私達一人一人は、それぞれの映画を作っていく。

一生の時間を費やして、その大作を作っていく。

主人公は他にもない、自分だ。

脚本も自分で書き、監督も自分が務める。

もちろん、自分が出演し、自分が主人公を演じる。

登場人物の数は、数えられないほどいる。

役名のある人もいるし、エキストラもいる。

ただ、普通の映画の制作と違うのは、

自分以外の登場人物が、台本通りやってくれないところ。

主人公の自分までもが、NGを出す。

それが難しくもあり、また面白いところでもある。

今、あなたの作る映画の撮影は、順調だろうか？

もし、なかなか筋書き通り進まなくなっても、全く気にする必要はない。

映画は、大逆転の方が面白い。

最後に笑えれば、最後に幸せになれば、それで良いのだ。

いつか、エンドロールが流れるとき、

あなたの映画は、多くの人々の心に残る名作となるだろう。

## 【思い出倉庫】

ここは、君の脳の中にある「思い出倉庫」。  
僕は、そこで倉庫番の一人として働いているよ。

「思い出倉庫」には、毎日毎日たくさんの思い出が運ばれてくるから、  
それをみんなで協力して、管理しているんだよ

倉庫も無限にあるわけじゃないからさ、  
新しい思い出が入ってくる分、古い思い出を処分させてもらっているよ。  
思い出として、思い出される機会の少ない古い思い出をね。

あと、仕分けも大変でね、喜び、怒り、悲しみ、楽しみ、  
その他にも、いっぱい思い出の種類があって、分類するのも一苦労さ。

特に大切な思い出は、念入りに梱包して、特別倉庫に保管されるんだ。  
決して、失われることのないようにね。

それから、君がその思い出を思い出した時に、スムーズに見せてあげること。  
これも僕らにとって重要な仕事だね。

そんな忙しい僕たちが休めるのは、君が眠っている間だけ。  
その証拠に、君は眠っている間に夢を見るだろ？  
夢の中には色々な思い出が、ぐちゃぐちゃに登場するだろ？  
それは、僕たちの元から色々な思い出を持ち出す、  
「思い出の持ち出し団」の仕業なんだ。  
彼らは、「夢を作る団」の指示で、思い出を適当に持ち出していく。  
僕たちの管理不足で、君におかしな夢を見せてごめんね。

それと、最後にもう一つ、君に謝らないといけないことがあるんだ。

それは、君が思い出として思い出す機会の多いはずの思い出なのに、  
その思い出を僕たちの判断で勝手に処分してしまったことなんだ。  
君のためにやったことだ。許してほしい。  
その思い出、君が思い出すには、あまりに辛過ぎる思い出だったから。

## 【枯山水】

日本庭園の様式の一つに、枯山水（かれさんすい）がある。

枯山水とは、水を用いることなく、石や砂などで、  
山水の風景を表現する庭園様式である。

水面を思わせる、その石と砂の紋様の見事なまでの表現に、  
繊細な日本的な美しさを深く感じ、心奪われてしまう。

庭の中の枯山水の風景を見ていると、庭を超越した、  
とてつもなく広がりのある空間を感じるのだ。

そんな枯山水ではあるのだが、  
最も美しく、綺麗に見える時間帯があるというのだ。

それは、夕方だ。

夕日によって、光と影のコントラストが鮮明に浮き出るため、  
その紋様の美しさが、より際立って美しく見えるというのだ。

夕方とは、太陽が沈む前の時間帯。  
まるで、人の晩年のようだ。

そう考えると、人間の真の美しさとは晩年にあるのかもしれない。

多くの人間の光と影を見てきたからこそ、  
そのコントラストを鮮明に表現することができる。

それは、鮮明であればあるほど、深みが増し、  
それが人間の真の美しさとも言えるだろう。

枯山水の美しさとは、人間の真の美しさそのものである。  
それは奇跡にも似た、神秘の美しさ。

## 【アイデア】

頭の中で何かアイデアが浮かぶ。

それはやはり形にすることで意味を成す。

自分の中のアイデアを形として表現し、  
外部と共有できる状態まで持って行ってこそ、  
アイデアと呼べるのだと思う。

とにかく形に残すのだ。

良いアイデアというのは、  
自分の頭の中だけで独占してはいけない。

良いアイデアは、大衆を巻き込んで、幸せを与えるものだ。

良いアイデアに出会った時、人は感動する。  
そして、その感動がまた良いアイデアを生む。

アイデアは感性の食事によって生まれる。  
感性を刺激してくれるものをたくさん食べることによって、  
それが脳の栄養となって、アイデアの種が作られる。

そして、形にすることによって、それが実となり花となり、  
自分を超えて、他の人にまでそれが伝わって、感動を呼ぶ。

だからこそ、アイデアを形にすることは大切なのだ。

画家が絵で、小説家が文章で、作曲家が音楽で表現するように、  
自分のアイデアを表現するものは何だっていい。

アイデアは決して自己完結ではない。  
周りの人にまで影響を与えるものだと思うから。  
そのアイデアは、誰かの喜びのためにある。

著者略歴

津村 修二 (つむら しゅうじ)

1983年福岡生まれ。日本放送協会学園高等学校卒業後、数社で営業職を経験。

2011年に独立し、「ツムラクリエイション」を開業。現在、オリジナル

すごろく、ボードゲーム、書籍の制作と販売などの事業を展開中。

## 津村修二 短編集「スイッチ」

---

2011年10月8日 発行

---

著者 津村 修二

発行者 津村 修二

発行所 ツムラクリエイション

〒819-0031 福岡県福岡市西区橋本 2-21-3

<http://tsumura-creation.com>

お問い合わせ先 [info@tsumura-creation.com](mailto:info@tsumura-creation.com)

---

Printed in Japan

(C) 2011 TSUMURA CREATION All Rights Reserved.

◆本書は著作権法上の保護を受けています。著作権者およびツムラクリエイションによる事前の同意なしに、本書の一部あるいは全部を、無断で複写・複製、転記・転載することは禁止されています。